



市街地と共存できる酪農を実現しています

山口県防府市 池田牧場

1 はじめに

防府市は、瀬戸内海の周防灘に面して山口県のほぼ中央に位置し、古くから周防の国の国府として栄え、交通の要所とされた歴史のあるまちです。

市内には、菅原道真公をお祀りする防府天満宮のほかにも、重厚な伽藍を残す周防国分寺、国の指定名勝の毛利氏庭園、併設された毛利博物館などがあり、また自由律俳句で有名な漂泊の俳人「種田山頭火」の生誕の地として、市内のいたるところに句碑が建てられています。

今回は、この防府市の市街地で酪農を営む池田牧場取材して、畜産環境などへの取り組みをお聞きしました。

2 池田牧場の歴史

池田牧場の現在のご当主は秀勝さんですが、お父様の隆雄さんが乳牛を飼い始めたのは、昭和35年頃のことです。当時は搾乳牛2～3頭、もちろん手搾りでした。牛乳を自家消費しながら、そのうちに防府酪農協に牛乳を出荷するようになりました。

昭和51年には、搾乳頭数18頭の牛舎を完成させ、パイプラインを導入しましたが、秀勝さんは近所にあるAコープの店長として常勤しておられたので、繁殖関連の仕事や出勤前後の作業以外の、日常の牛舎の仕事は、お父様、お母様そして奥様でこなしてきました。

ちなみに、秀勝さんは、勤務先のAコープの店舗改革を進め、特に鮮魚売り場を充実させて売り上げを大幅に伸ばした伝説の店長さんだそうです。

平成10年には、秀勝さんもAコープを退職され、専業酪農家となりました。

3 第一次糞尿処理計画

平成6年のことでした。池田さんは、田んぼで夏は米作り、裏作にイタリアンを栽培していましたが、ある日、田んぼに堆肥を撒いたところ、ご近所

の方から臭気の苦情を受けてしまいました。それまでは、堆肥といっても牛糞は「ただ溜めておくだけ」だったそうです。

そこで、ご近所に迷惑はかけられないと、一念発起して糞尿処理に取り組むことになりました。全長60mのビニールハウス式の牛糞乾燥施設を導入し、そのほかに堆肥舎も建てましたが、肝心の堆肥の臭気改善と堆肥発酵促進のために何か良い資材がないかと探していたところ、防府酪農協から勧められたのが、当社が販売する「微生物飼料スノーエックス」でした。

スノーエックスの効果はてきめんで、臭気が減り、堆肥の発酵もとても良くなって、池田牧場の堆肥は周辺の畑作農家からも引っ張りだこの人気になりました。あの時、スノーエックスに出会わなければ、都市型酪農として生き残れなかった、と奥様はおっしゃいます。

4 バイパス道路と牛舎の移転

そのうち、新たな問題が発生しました。市の北側を走る国道2号線から臨海部の工業地帯に向けてバイパス道路を建設する計画がもち上がり、その道路が池田牧場の母屋と牛舎の真上を通ることになったのです。

陳情書を提出するなど、いろいろやり取りがあったそうですが、結局、池田牧場は移転せざるを得ないことになりました。



微生物飼料 スノーエックス

幸い、池田さんの所有地は広く、牛舎を壊しても、その右側に新しい場所は残ります。しかし、その場所に牛舎を移転すると、ご近所様に接近することになって畜産公害が心配されます。県の指導機関からも、「山の上に牧場を移転するか」「どうしてもこの場所で酪農を続けるのなら、しっかりとした公害対策を」と求められました。

5 牛舎の新築と第二次糞尿処理計画

何としても、今の場所で営農したいと考え、池田さんは情報収集を始めました。いろいろと県外の施設も視察したそうですが、最終的にはスノーエックスで10年来のお付き合いがあった当社の「**戻し堆肥技術**」と「**堆肥発酵機**」をお選びいただくことになりました。

これまでのような牛糞乾燥施設は、どうしても臭気が出ること、気温の下がる冬場に処理能力が落ちること、増頭により更に面積が必要になることなどから限界を感じており、牛舎の新築に合わせて「より良いもの」を探したところ、ランニングコストが安く、特別な副資材の必要がない当社の堆肥発酵機に辿り着きました。

淡路島にある同型機ユーザーの牧場を家族で訪ね、牛舎の臭いが無く、ハエがない、堆肥の品質が良い状況を確認して、導入を決められたそうです。

平成14年の年末には、46ベッドのフリーストールを中心として、育成・肉牛用のルーズバーン、4頭ダブルのパラーなどからなる牛舎を新築し、ご長男の英雄さんも酪農協を退職して牧場スタッフに変わりました。現在は、秀勝さん、奥様、息子さんの3人体制で、乳牛も徐々に増頭して約40頭を搾乳しています。

もちろん「戻し堆肥技術」も軌道に乗って、現在の池田牧場は、臭気の無い、ハエのいない牛舎と堆肥舎を実現しています。



堆肥発酵機 沃野12型

6 戻し堆肥技術の発信地として

山口県は、酪農家戸数が少なく、牛乳の輸入県です。特に、池田牧場のある防府市近辺には大型の酪農家が少ないため、池田さんは牛舎の新築に際して情報不足を痛感したそうです。

計画当初は、「フリーストール」「戻し堆肥」と言っても指導機関にも理解してもらえなかったそうですが、新築から一年半を過ぎ池田牧場の実績が評価されるようになって、県内の同業者から「次はフリーストール牛舎を建てたい」とか「戻し堆肥に挑戦したい」との声を聞くようになりました。

実は池田牧場でも、新築一年目の夏には戻し堆肥が間に合わず、ベッドにオガクズを使ったところ、これが原因と思われる劇症の乳房炎が頻発して大変苦労しました。

現在は、出来上がり堆肥とオガクズとを1：1に混ぜて温度を上げ、そのまま数日おいて有害菌を除去してからベッドに敷料として使い、効果を上げています。

この一年間ご苦労された息子さんは「フリーストール牛舎では牛の管理が楽になると思ったが、むしろ個体管理が大変になった。しかし牛をよく見れば結果につながることもわかった。」と経験談を披露してくれました。



戻し堆肥のベッドと清潔な牛群



ハエのいない堆肥舎



戻し堆肥敷料の製造

また、これから戻し堆肥を目指す人に対して、「オガクズより戻し堆肥敷料のほうが、牛が好んでベッドに入るし乳房炎の心配も少ないようだ。」「堆肥は生き物、手をかけただけ良いものができる。」とも話してくれました。

今後とも、池田牧場は「戻し堆肥技術」の先駆者として、周辺の酪農家に情報を発信してゆくことでしよう。

7 地域の仲間と循環型社会に貢献

話は変わって、奥様の静枝さんは、家事と牧場の仕事の傍らで、県の農家生活改善士として公的な活動にかかわってこられました。

山口県では平成13年に「やまぐち食と緑のプラン21」が策定され、これを県民の立場で推進するために「やまぐち食と緑の県民フォーラム」が組織されました。

奥様は、当初から「食育ボランティア」の立場でフォーラムの実行委員として活躍されています。

具体的には、牧場近辺のお仲間と「生ごみ堆肥化による資源循環」に取り組んでおられ、牧場の堆肥に生ごみを混ぜ込んでリサイクル堆肥を作り、花壇や野菜作りに利用しています。

また、昨年は近隣の小学校の体験学習を受け入れて、子供たちにバター作り、生ごみ堆肥作りなどを指導し、テレビや新聞でも紹介されました。



小学校から贈られた感想文、お礼状



奥様の「牛糞・生ごみ」堆肥

学校から池田牧場に贈られた小学生の感想文を読ませていただきましたが、堆肥を宝物のように触ったり、牧場を再発見したり、搾りたての牛乳の甘い味、自分で作ったバターの美味しさ、ごみが堆肥になる驚き、たまたま牛のお産に立ち会えた感動などがとても純真に綴られていて、まさに都市型酪農の立地を生かした「食育」活動の実践例と感じた次第です。

8 さいごに

池田牧場を訪問したお客様が、皆さん感心されるのが、牧場全体の環境整備状況です。事務所の前には草木がセンスよく配置され、堆肥発酵機械の周囲なども見事に美しく緑化されています。

微生物資材、堆肥発酵機、戻し堆肥技術など、臭気を出さない取り組みはもちろん重要ですが、このような牧場の景観、見た目の美しさも、環境改善の大切な要素であることに改めて気づかされます。

実は、秀勝さんのご次男の満雄さんは、独立して池田造園を営むプロの造園士で、ご実家の環境緑化にも一役買っているわけです。

このようなご家族皆様のご努力で、ますます池田牧場が発展され、また地域における食育や循環型社会の実現にも貢献されることをお祈りしつつ、このあたりでご紹介を終わらせていただきます。



楽しくレイアウトされた事務所前